



愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん、一週間もみんなお元気でしたか。

キリスト教において伝統的にイースターの日曜日の前までにして40日間を四旬節(レントとも呼ばれる)と呼ばれ、キリストの受難に参加する思いで、断食や悔い改めを含めて敬虔に過ごしながら、イースターを備える期間をもっています。特に今週からは四旬節の最後の受難週間に入ります。そして、今日は2012年度の総会を迎える主日を迎えました。一年間の歩みを振り返えながら、いままで我々を守り、導いて下さった神様に感謝し、栄光を返す時間だと思えます。それだけではなく、2013年度を迎えながら我々は新しく奉仕者を立たせ、神の栄光と主の教会のためにどう仕えるべきなのかを祈るとしても大切な時期です。もしかすると一年中の中で、一番大切な主日を迎える今日、我々は神様から与えられた一番大切な命令と戒めがなにであるかをさぐるべきではないかと思えます。その意味で今日の聖書の本文が我々によく教える箇所だと信じます。

<本文の説明>

ある律法の専門家がイエスをためすために言いました。“先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。”(25節) さっそく26節でイエス様はその律法の専門家に“律法には何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。”と問い返しました。律法の専門家は27節で“心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。またあなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。”とあります。”と答えました。

その答えを聞いたイエス様は“そのとおりです。それを実行なさい。そうすれば、いのちを得ます。”

律法の専門家の質問である“何をしたら永遠のいのちを得ることができるでしょうか。”を言い換えると“神の民は何をすればいいでしょうか。”という意味です。すると、神様は神の御民にどんな命令をされ、神の御民はなにをすべきでしょうか。

1. 神を愛さなければなりません。

本文の27節で“心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くしてあなたの神である主を愛せよ。”これは旧約の申命記6:5の箇所をそのまま引用した御言葉です。

大切なのはこの御言葉はイスラエルの民が主の宮で礼拝をささげるとき信仰の告白として使われた御言葉(申命記6:4-9, 11:13-21, 民数記15:37-41)の一箇所としてヘブル語で“シェマ(שמע Shema)”とも言います。

ユダヤ人たちは御言葉を羊皮紙(ようひし)に記録し、樽(たる)に入れて門柱につけましたが、その樽を“メジュジャ(Mezuzah)”ともいい、出入りするたびにその樽を触りながら“主が私の出入りをいまからとこしえまで守られますように”と祈り、メジュジャに口づけながら神の御言葉に対する敬意を表しました。

それだけではなく、ユダヤ人の男たちは祈るとき、羊皮紙にシェマを記録し、小さいマッチ箱のような皮の箱に入れて長い皮のひもでひたいと左腕に結んで祈ります。これを“経文(きょうもん)”ともいい、“祈りのひも”という意味の“テピリム”とも言います。ユダヤ人たちがこれほど御言葉を大切にするのは神を全人格で愛するという表現だそうです。

するとどうすれば全人格をもって愛することができるでしょうか。?

イザヤ43:21“わたしのために造ったこの民はわたしの栄誉を宣べ伝えよう。”イザヤ43:7には“わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。”

ここで“神を賛美し、神の栄光のため”というのは一言で言うと“礼拝”です。

ですから、心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして神を愛するという一番説明できる単語が“礼拝”なので“神に御言葉と祈りと賛美をもって心から礼拝をささげ、これを大切に守ることこそ全人格をもって神を愛することである”と言えます。

ですから、何より神を愛するというなら、今年礼拝を最優先に守り、ささげなければなりません。信仰生活において礼拝より大切なのではないので、礼拝に我々は心を尽くし、力を尽くし、知性を尽くさなければなりません。まことに神を愛するのであれば神に礼拝することに対して妥協してはいけません。そして、どんな約束よりも神に礼拝をささげる主日を敬虔に守らなければなりません。日曜日一日を完全に聖別しておきましょう。主の教会に出て、神様に礼拝し、信仰の家族と交わりし、主の教会のために奉仕し、一週間の生活を振り返り、新しい一週間のために祈り、与えられる御言葉を黙想する時間となるように心かけましょう。

神様は礼拝をささげる人を大切に、探すだけではなく、礼拝をささげる者にすばらしく祝福を与えて下さいます。その例として第二サムエル6章にダビデが王になった後、エリ祭司のとき、ペリシテに奪われましたが、戻ってきてユダのパアラにある

神の箱(契約の箱)をダビデのお城に移そうとしました。大切なのは神の箱は横(よこ)125cm, 縦(たて)75cm, 高さ75cmである小さい箱なのに、この箱を動かすためにイスラエルで選ばれた三万人とダビデと一緒にいたすべての人々を総動員させました。要するに国家的な大行事だったため多くのイスラエルの人はほとんど、それを知っていて、神の箱が移されるのを見たと思います。しかし、ダビデは背負っていくべき神の箱をどうして新しい荷車に載せて、運ぼうとしたかわかりませんが、神の箱を載せた荷車がナコンの打ち場まで来たとき、牛が神の箱を乗せた車をひっくりかえそうになったためウザという人がそれをおさえるために神の箱に手を伸ばしました。なのに、神のいかりがウザに燃え上がって死んでしまいました(7節)。それを見たダビデは神の箱をお城に運ぶのをやめてガテ人オベデ・エドムという人の家に回しました(10節)。

確かに、オベデ・エドムという人もウザの死を見たはずなので恐れていたと思います。しかし、王のなさることなので、恐れをもって受け入れたかも知れません。ところが、大事なものは“こうして、主の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三ヶ月とどまった。主はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された(第二サムエル6:11)”と書かれています。

ここで“主の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三ヶ月とどまった”というのはオベデ・エドムの家で毎日朝、夜いけにえがさげられたという意味であって、神様は毎日ささげるオベデ・エドムの家に祝福を与えて下さいました。神の臨在の中で、神の御言葉にしたがって、礼拝をささげるとき、神様はその家庭に祝福を与えた下さったわけです。ですから、礼拝を大切に重んじなければなりません。

これをイスラエルの歴史家であるヨセフス(Flavius Josephus)は“ユダヤ人の歴史をみるとすでに、歴史から消えるはずなのに、消えるところか、むしろさらなる影響を与えている。その理由はユダヤ人たちは主の日(安息日)を徹底的に守ったが、ユダヤ人が主の日(安息日)を守ったか、主の日(安息日)がユダヤ人たちを守ったかは分からない。”と言いました。これを、違った表現で言うと“神様に真心をもって礼拝する民族は滅ぼさない。”という歴史的な教訓なのです。ですから、今年一年間も神を愛する者たちに表される証拠として、神様に礼拝することをまず優先に守ることを覚えましょう。

2. 隣人を愛さなければなりません。

そして本文の27節で神様は“あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。”と言われました。

神様をまことに愛し、御言葉と祈りをもって敬虔に生きる人は当然、ほかの人をも愛を表すでしょう。なのに、それにもかかわらず、神様はなぜ、あなたの隣人をあなた自身のように愛せよと。命じられたでしょうか。神を愛すると言っている人々はともすると自分だけがいつも神の前で正しいと思い込んでしまい、高慢になってむしろ自分の信仰と奉仕によってほかの人を責め、判断してしまいやすいからです。

創世記2:18で“神である主は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」”これはただ夫婦の間の女性の役割だけを言われたものではありません。もっと拡大して理解すると、神様が人を創造された目的は助け手つまり、ほかの人に仕えるためなのです。

そういうわけでイエス様はマルコの福音書10:45で“人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のために、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。”と言われたのです。第一コリント人への手紙13:3で“また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。”これは、どんなにほかの人のために仕え、奉仕をたくさんしても愛する心からやらなければ何の益にもならないという意味です。

ですから、神様を愛し、イエス様を信じる我々もほかの人を助け、仕えなければなりません。神様は今日神様を愛する者たちにまた“あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ”と命令して下さいています。

とつても残念なのはこんにちにはあまりにも極端的な個人主義と自己中心になっているためほかの人にはぜんぜん関心がない時代になりました。ただ、自分だけが犠牲を払い、自分だけが頑張ったと思い、自分だけ、自分の家庭だけ、自分の子供だけ祝福されればという思いがますます我々を支配しようとしています。それで、礼拝をきちんと守り、十分の一献金をしっかりささげ、教会の奉仕をたくさんすれば信仰の良い人として評価されてしまいます。

しかし、神様の御前で大切なのは神様を愛すると言いながら隣人はどれだけ自分自身のように愛しているのかです。

もう一度、今日の本文に戻ると、律法の専門家は律法に従って神様にいけにえをささげることには熱心だったかもしれませんが、隣人を愛することには問題がありました。なぜなら、この律法の教師は自分の隣人がだれなのかすら知らず、信仰の生活をしたからです。これはつまり、自分だけの信仰生活をしたわけです。もし私たちが今まで信仰生活が彼のようにではなか

ったのか自分自身を省みるべきです。これはキリスト教の本当の信仰ではありません。神は愛なり！キリスト教の核心は愛です。聖書のテーマを一言で、まとめられると愛なのです。

イエス様は今日我々が愛すべき隣人がだれであるかを具体的に教えて下さいました。ある人がエルサレムからエリコへ下る道で強盗に襲われて、殴りつけられ、半殺しされ捨てられました。たまたま一人の祭司が彼の横を通りましたが、通り過ぎて行きました。もう一人のレビ人も彼を見ると、反対側を通り過ぎて行きました。ところが、あるサマリア人が旅の途中、彼を見てはかわいそうに思い、近寄って、傷をみてオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをして、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやりました。(33-34節)

そして、次の日、宿屋の主人にデナリ二つを取り出し、“介抱してあげて下さい。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。(35節)”と言いました。

イエス様はこのたとえ話を終えた後律法の専門家に“この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いませんか。(36節)”と質問し、これに対して律法の専門家は“その人にあわれみをかけてやった人です(37節).”と答えました。

これにイエス様は律法の専門家に“あなたも行って同じようにしなさい。”と言われました。

我々が神様にあわれみを受けたように我々も軟弱で、困った人々に対して愛を持ったあわれむ心を持たなければなりません。

そして、このサマリア人のように神様を愛するのであれば、愛の犠牲と行動が伴われるべきだと信じます。

本文の34-35節で“近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介護してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「介抱してあげて下さい。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。」とかかれています。ここで、覚えるべきことは、強盗に襲われた人を助けることは愛を行うことであって、愛を行うことには時間も努力も、お金も必要です。サマリア人は強盗に襲われた人のために自分の持っていた油とぶどう酒を使い、そして、次の日、宿屋の主人にデナリ二つを渡しながら、介抱を頼み、もっと費用がかかるなら帰りに払うと言いました。ここで、サマリア人があげたデナリ二つはいくらぐらいでしょうか。マタイの福音書20:2によると、デナリ一つは労働者の一日の賃金なので、そんなには大きい金額ではないと思います。しかし、当時ローマ時代の一日宿泊代は1/32デナリだったのに、二つのデナリとはつまり約二ヶ月の宿泊代くらいだと言えます。大切なのは愛とはある観念や感情ではなく自分にあるものを犠牲にし、労苦することです。サマリア人の犠牲と愛の行いがなかったなら、強盗に襲われた人はそのまま死んだと思います。このように今日もみなさんの犠牲と愛の行いがなければ、みなさんの周りにいる多くの人々は永遠の地獄で苦しまれるでしょう。


ある教会の玄関にだれかが生まれたばかりの布にくるまれた赤ちゃんを捨てて置いて行ったそうです。早朝の祈りの時に牧師先生も、長老さんも、執事さんも、教会のメンバーらもその赤ちゃんを見たのに、だれもその赤ちゃんを何とかしようとも、しばらくだけでも自分たちが預けようともせず、ただ、口だけでかわいそうにかわいそうにと言っていたそうです。結局、新聞配達をしていた人が消防署に知らせ、孤児院に預けられたそうです。自分の子供を捨てなければならなかった母の事情がどうであれ、すくなくとも、この赤ちゃんを教会に捨てたということはイエスを信じる人ならきっと優しい人であろうという考えがあったからだと思います。もし、この赤ちゃんの母がこの事実を知ったなら、教会に対してどんなに失望したでしょうか。恥ずかしいことですが、これがまさに我々の教会の現住所だと思います。口先では伝道と宣教も熱心で、奉仕も、愛と犠牲も熱心なのに、いざ、自分の周りに起こっている大きい、小さいことなど、自分の手を伸ばして助けるべき決定的な時には知らん顔をしてしまうことがどれだけ多いでしょうか。

愛するみなさん!今年の四旬節、特に主の受難週間を迎えながらそして、新しい2013年度のためにイエスを信じている我々がやるべきことは何でしょうか。何よりも神様を愛するなら、自分の隣人にイエス様の愛を実践すべきではないでしょうか。そして、イエス様の愛によって、イエスキリストを伝えなければなりません。なぜなら、伝道することこそたましいを生かす最高の愛だからです。イギリスの福音主義の指導者であるジョンストット(John Stott)牧師は“隣にいる人に関心のない礼拝は正しい礼拝ではない。”と言いました。

イエスキリストの受難週間を迎え、キリストの苦難と復活の栄光に参加するために我々は敬虔に過ごさなければなりません。どのようにするのが、敬虔に生きることでしょうか。一言で言うと、心から神様を愛し、隣人に愛を実行することです。

神様を愛することは礼拝を心からささげることであり、隣人を愛することは強盗に襲われて死にそうになっている人を助けるように自分の力と助けを必要としている人々をかえりみ、惜しまず、キリストの愛を分け与えることです。ですから、今回の四旬節期間中、そして新しい2013年度には、礼拝に成功し、愛の奉仕と、キリストの愛を分け与え、伝道することに成功することができまるクリスチャンプレイズの家族みなさんとなりますようキリストの御名によって祝福します。アーメン!

2013年度標語—『神を愛し、隣り人を愛し、主の教会を愛する教会』(マルコの福音書12:29-31)

 “心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。次にはこれです。
あなたの隣り人をあなた自身のように愛せよ。この二つより大事な命令は、ほかにありません。”

敬愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！2012年度に我々の教会は「共に御言葉に深く根ざして行く教会(ヨハネの福音書15:7)」という目標を立てて目指して来ました。イエス様が私たちを選び、任命されたのは私たちが変わり、回復され、強められ、いつも実を結ばれるため(ヨハネの福音15章16節)であることを共に覚えつつ、1年間主のご栄光のため、主の教会のため共に心を尽くし、力を尽くして愛の献身と祈りと奉仕をして下さったみなさんお一人お一人に心から感謝し、主イエスキリストの恩寵がみなさんの上に豊かに溢れますようにお祈り申し上げます。

さて、今年10月になりますと、クリスチャンプレイズチャーチが正式に始まって10年目を迎えるようになる意味深い大切な今年一年となります。主に切に祈りつつ、10周年を迎える主の教会のため我々が共に特別なこの一年何を目指し、どのような信仰の目標を主の御前で立てて歩むべきなのか準備している中、御言葉から教えられたことは何か特別なことではなく、イエスキリストから言われた一番基本の戒めでありながら、一番大切である戒めを従い、守ることであることでした。つまり、心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神を愛し、隣人の自分のように愛すること(申命記6:4-9、10:12-19・マタイ22:37-39)でした。大切なのはこの御言葉はイスラエルの民が主の宮で礼拝をささげるとき信仰の告白として使われた御言葉(申命記6:4-9、11:13-21、民数記15:37-41)の一箇所としてヘブル語で“シエマ(שמע Shema)”とも言います。つまり、具体的に人が神様を心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして愛することは礼拝を第一に優先にすることであり、神の御言葉と神に祈りを持って日々全人格的に神様と親密な関係を保って歩むことでしょう。

また、27節で神様は“あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。”と命令されました。神様をまことに愛し、御言葉と祈りをもって敬虔に生きる人は当然、ほかの人をも愛を表すでしょう。なのに、神様はなぜ、あなたの隣人をあなた自身のように愛せよと共に命じられたのでしょうか。神を愛すると言っている人々はともすると自分だけがいつも神の前で正しいと思い込んでしまい、高慢になりがちであるからです。むしろ自分の熱心な信仰と奉仕によってほかの人を自分が神のように責め、判断してしまいやすいからです。

イエス様はマルコの福音書10:45で“人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のために、購いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。”と言われたのです。第一コリント人への手紙13:3で“また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。”これは、どんなに神を愛すると言いながら信仰に熱心で、奉仕をたくさんしても愛する心からやらなければ何の益にもならないという意味です。ですから、神様を愛し、イエス様を信じる我々もほかの人を助け、仕えなければなりません。神様は今日神様を心から愛する者はまたあなたの隣人もあなた自身のように愛するべきであるとチャレンジして下さっているのです。

そして、神様を愛するため礼拝中心、御言葉と祈り中心となって、まず人を自分のように愛することをこれから実践すべきところが主の教会の中であること(第二コリント8:24、コロサイ1:25)を共に覚えて歩む教会となるように祈ります。ですから、教会のかしらである主イエスキリストを愛し、主の体であり、各器官である兄弟姉妹を自分のように大事にし、愛を惜しみなく分け与えつつ、仕えて歩む2013年度となりますように主イエスキリストの御名によって祝福し、お祈り申し上げます。アーメン！

- 1) 神様を愛する教会(申命記6:4-9、10:12-19・マタイ22:37-38)
- 2) 隣り人を愛する教会(マタイ22:39・申命記10:18-19・ガラテヤ5:13-15、6:9-10・第一テモテ4:8-11)
- 3) 主の教会を愛する教会(第二コリント8:24・エペソ3:20-21・コロサイ1:25・第一テモテ3:15)